

「特別寄稿」 トラジの唄

岩佐 晴夫
岡森 利幸
源 桃子

(一)

洪沢の『トラジ』が二〇一七年一月二十九日をもって営業を終了するという情報にボクが接したのは前日の二八日夕方のことだった。寝耳に水のことであり、まったく偶然のことでもあった。一年に一度開かれる神工職員OB会「我樂多会」の宴席でその情報を耳にしたその場から、ボクは『みなせ』の主なメンバーに電話を掛けて、とりあえず、二十九日の営業最終日に『トラジ』に顔を出すことを呼びかけた。今日の明日という日取りだったが、幸いなことに事務局長の岡森さんと源さんに賛意をいただいて、その旨、『トラジ』の伊藤さんに連絡した。「この話、あなたのところに伝わりましたか。ええ、お待ちしています」というのが伊藤さんの答だった。

伊藤さんもボクも長いこと神奈川県立高校の教員として仕事をしたが、同じ職場の同僚としては一年間だ

けの短い期間だった。ボクは一九六〇年、安保の年に新卒新採用で神奈川県立工業高校に赴任し、伊藤さんはボクと四つ違いだから一九六四年に神工に着任したということだったろう。伊藤さんと初めて顔を合わせたのは、ボクが木材工芸科の生徒を三年間持ち上がりで担任して卒業させたばかりのときだった。普通、教員は学級を担任するのが基本だから、このことを強調するのは異常と言っていることなのだが、ボクの場合は一九七二年に神高教本部役員に出たものだから、学級担任歴はあまり持っていないために、今でも記憶が鮮明なのだ。

伊藤さんは建築科の教員で、神工に二〇年以上務めた後城北工業に異動して、定年の一年前に退職したと聞く。当時は今のような事務的機械的な人事異動原則がなく、専門学科の教員は生涯二校勤務で退職するというケースも珍しいことではなかったのだ。

伊藤さんには、神高教が現在の会館を建設する時會館建設委員の仕事をお願いした。一九八二年六月着工、八三年五月竣工の神高教会館は三階建て三〇〇坪ほどの大きくはない建物だが、建設に際して法人格取得の契機となるなど、神高教運動の拠点として今も立派な役割を果たしている。

二〇〇一年春に退職した伊藤さんがその年の秋に『トラジ』のマスターにおさまった経緯について、ボクはほとんど知識がないが、『トラジ』を始めたことは伊藤さんからハガキをいただいて承知している。この間、伊藤さんとのつきあいは神高教会館建設のときのこと以外は年賀状のやりとりだけなのだから、開店通知は珍しいと言えば珍しいことだった。一度は顔を出してみようと思いつながら、無為の何年かが経過した。ボクが、最終勤務校の瀬谷高校の時に一緒に書いた橋本先生に誘われて『みなせ』に寄稿し始めたのは三〇号（二〇〇六年五月刊）からのもので、文芸誌の同人になったのもこのときが初めてだった。元々ものを書くことは手慣れていたが、文芸とか文学とかと言われると、果たしてボクのものにはそれに該当する作品であるか、はなはだ心許ない感がするのだ。

入会当時の『みなせ』は会長が常田先生、事務局長が橋本先生だったと記憶している。横浜方面の会員が多かったとか、合評会は相鉄線沿線の三ツ境とか、瀬谷とか海老名の辺りで開かれることが多かった。合評会の後カラオケへ繰り出すのは今と同様で、会長や須藤さんが特にお好きで上手だった。お二方とも今は故人となつて、天上からその後の『みなせ』を見守つて

いてくださっている。

ときが経過するうちに、合評会の幹事が何となく輪番制になり、ボクにも幹事の役が回ってくるようになった。会員も横浜在住の方が少なくなり、替わつて小田急線の秦野・渋沢、小田原以西の方々が多くなつた。

このような経緯から、ボクが幹事役のとき、伊藤さんの『トラジ』を初めて合評会の会場に選んでみることにした。やってみると、店内の照明のやや暗いのが難と言えど難だったが、その他は快適で、会費も伊藤さんの配慮のお陰で安くすませることができたのだ。特にありがたかったのは合評会後のカラオケがそのままの延長でできることだった。気をよくしたボクたちは『トラジ』がすっかり気に入つて、何度も続けて合評会を開くなど、事務局長の岡森さんの記録では前後七回、会を持ったのだった。

時間外に利用させていただいた『トラジ』の損益分岐点はおそらく利用者一〇人のあたりにあったのだろう。三千円の会費で出前の寿司を取つて、ビール焼酎飲み放題では、貸し席事業は大赤字だ。参加者が四、五人というのでは何もしないほうがむしろ良かった。かくて、開始時刻を五時にするなら席を貸してもい

い、という伊藤さんの提案となり、とみに高齢化の進んだ『みなせ』では折り合う余地がなくなつた。

どういふ事情や都合で伊藤さんが『トラジ』を畳んだのか知る由もない。何度も利用させていたいただいたに、『トラジの唄』の一つも歌わなかつたことが心残りである。七五歳だ、七五歳だ、と強調した伊藤さんに、なお残りの幸が多からんことを祈るのは空々しい仕儀であらうか。

(岩佐晴夫記)

(二)

みなせ文芸の会が合評会の会場として渋谷駅から歩いて5分ほどにあるスナック「トラジ」を利用したのは、2013年12月8日からだった。約2年間にわたつて7回ある。いずれも午後2時からの開始だった。早めに来る人もいて、特別早くから店を開けてもらつていたのだが、午後7時を開店時間としていた店としては、マスターの伊藤さんやホステスの女性には、かなり無理をして対応してもらつていたことになる。好意に甘えすぎたのかもしれない。結局、早い時間の開催は拒否されてしまった経緯がある。

そんな縁があつたので、このほど閉店を知つた岩佐

さんの声かけにより、最終の日に店に行つてみた。その夕方、私と岩佐さんは、下りの電車で偶然乗り合わせ、渋谷駅で降りた。当初は駅で源さんと待ち合わせすることになつていたが、岩佐さんが交通事情により店で落ち合うことを連絡していたから、すぐにわれわれ二人は店に向かつた。6時30分ごろ、早めに店に着いた。まだ準備中だというマスターの言葉を押し切つて、中に入った。

「おかまいなく」と私。開店時間は7時だったし、確かに店内は、昨夜のご乱業の跡(?)がまだ片付いていなかった。フロアには2リットルのペットボトルなどが転がつていた。これだから、われわれはいけないのかもしれない。それでもマスターは、酒やつまみを出してくれた。昨夜は多くの人に来ていたという。大量にストックしてあつたおしぼりを使い果たしたそう。私は、手土産代わりに、みなせのバックナンバーなどを数冊持つてきていたから、渡した。すんなり受け取つてもらえたのには、ほつとした。

実は、それより少し前に源さんが来ていた。マスターが準備中というと、「外で時間を潰して来ますね」と答えて、中に入らなかつたという。しかし、7時になつても彼女は来ないから、岩佐さんが携帯電話で源



当日店内で、トラジのマスター伊藤さん

さんに連絡を取った。われわれが店に入れてもらったときに、すぐに連絡を取ればよかったかもしれない、と私は思った。携帯電話を持っていない私には、そんな発想が浮かばなかった。

メンバー三人がそろってから、飲み直し、なぜトラジを閉店するのか、ということに関心が集まった。マスターに直接聞いてみないとわからないわけで、マスターの手がすいたところで、傍に来てもらった。

われわれ三人は、コーナーのあるソファー席に座っており、マスターは、テーブルを挟んで、丸椅子に座った。

「どうして閉店するんです

か？」

「もう年だから。75になる。読みたい本がたまるばかりだ。店をやっていると、自分の時間がない」

「店が儲からないから、という経済的な理由ではないんですね」

「儲かるような商売だったら、手放したくないだろうけど、儲かりもしないし、損もしないようなところで、何とかやってきた。トラジを始めたのは59のときからだから、15年になる。高校教師を辞めた後、韓国に興味を持って、ハンブルを覚えたり韓国旅行したりしていたから、トラジという韓国風の名の、この店が売りに出されていたので、引き継いだ。たかさんの生徒をみて来た経験があったから、客をみることに大差はないだろうと思いい、この商売をやってみる気になった。そのころ家庭内のもめごとがあったりして……。離婚したわけだ」

「そのもめごとというのは、どんなことですか？」

「女房がぼくをリス・ペクトしないんだよ」

リス・ペクトしない理由とは、何だろうと思ったが、そこまで立ち入って聞けなかった。もし聞いたとすれば、「知らんよ。元女房に聞いてくれ」と言われてしまいそうだ。

(岡森利幸記)

「急なことです」と、岩佐さんから電話をいただいた時、私はあるイベントのリハーサル会場にいた。

トラジが閉店することになったので、最後の日に一緒にしませんか？とのことであつた。開店ならともかく、けつして常連客などではない私などが伺つたのはトラジさんも嬉しくなどはないと感じ、その旨をお伝えすると、「そんなことはありませんよ」と岩佐さん。然らば伺わんということになつた。当日は文化会館での用事が終了後、重い荷物があつたため一旦帰宅し、トラジへと向かう。途中、岩佐さんより電話が入り、バスの都合で大分遅れるとのことだったので私は歩調を緩めた。何しろ、肝心の岩佐さんが到着していないトラジで、少しでさえ時間を過ごすことは、私にとつて気分的に困難なことであつた。しかし岡森さんが早めに着いていたとしたら……とも思い、ともかくトラジへと向かつた。

久しぶりのトラジへの階段は私の鈍い足どりをどうにか二階へと運んだ。鈍色のドアノブを押し引くと鍵がかかつていた。だれもない風であつた。

最後の日とあれば、人の気配のひとつもあつて良さそうなのだが……と思ひながら、私は同時に近くの喫茶店の存在をイメージした。

階段を下りようとしたその時、ガシャリとドアが開いた。見覚えのある親爺さんが顔を覗かせた。

「夕べ遅かつたのでまだ準備ができてなくて」

なるほど、フロアーにはベットボトルが転がり、床も汚れていた。当然岡森さんの姿は無く、ニコチンの匂いが充満していた。

「外で時間を潰して来ますね」

と言つて私は階段を下りた。

みなせの合評会をトラジでやることになり、そこが岩佐さんの知友でもあるという安心感もあつて、地元である私は当初、何度となくトラジを訪ねたものであつた。時にはサークルの仲間と、時には女子？会で、時には夫と。

トラジの親爺さんはいつも身だしなみをきちんとしていた。四十、五十、六十才台の女給サンらが、日替わりで働いていた。親爺さんと女給サンら是一名を除いて、言葉づかいが雇用主と対等であつた。

親爺さんは商売を度外視している風であつた。

奥様がいらつしやらない気楽さからなのか、女給さんらに職場（？）を提供し、異世代との会話を楽しんでいるといった印象であつた。

店内を清潔にして客に快適な時間を過ごして貰うというごく普通のことには女性たちはおよそ無関心のものであつた。

むしろ親爺さんが女給さんたちに仕えているようにもみえた。定年退職後、もしも私が男性で、中くらいの大きさの財布を持っていたら、こんな生き方も選択肢の一つにしたかもしれない。少なくとも、テレビを見たり、ひなたぼっこをしたり、預金通帳の残高とにらめつこの毎日よりははずつと楽しいはずである。

トラジのすぐ近くに私の行きつけのスーパーがある。買ひ物の道すがら、トラジの店頭の韓国風の飾りが揺れているのを見ると親爺さんと女給さんのため口での会話が聞こえて来るようだつた。

一月二十九日、喫茶店で岩佐さんからの連絡を待つてトラジへと向かう。長い金髪、太股までの黒い網タイツ、厚底の靴などが狭いカウンター付近にうごめいていた。止まり木には一人、かつてわたしを怒鳴りつけた事のある六十才台の眼光の鋭い女性客がいた。確か彼女は旦那さんと別居していると言つていた。私は

彼女に異物であるかのように扱われたことがあつた。

その時はじめてトラジという店が、私などがノココと行けるような店ではないことに気づいた。

一月二十九日にトラジが店を閉めてから六日目、つい最近まで韓国風の飾りが揺れていた店頭にはピンク色の新しい看板が掛けられていた。

「フィリピンパブだつてよ」

と、階段の下で見知らぬ男女の会話が聞こえてきた。ちなみに、トラジの親爺さんに聞いた話だが、階段の右下には、トラジの以前の経営者が新たに『ちよあよ』という店を開店させていた。

何はともあれ、丹沢の麓という活気の乏しいこの町に新しく店が開店するということは、地元で働く若者たちに遊興や出会いの場を提供することにもなるのだ。トラジの灯に替わつて今度はピンク色の新しい灯がともされたのだ。

節分を過ぎ、わが家の一本だけの河津桜の芽もふくらみ出した。今年の桜は早そうである。

山形の能楽師から先刻、メールが届いた。

「芋煮会をしよう！牛肉は持つて行くよ」と。

(源桃子記)